※獣姦です。人間が受け身の獣姦。

あなたの願いを叶えます。――サンプル――

これはとある特殊性癖博物館の系列店の話である。営業は二十四時間体制。しかし給与保証や労働時間、怪我をした場合や病気になった場合の医療費保障まで充実して働きやすい環境を作っている。

そして今日も朝からハットの似合う初老の紳士が犬と共に来店した。

「いらっしゃいませ」

「やぁ。予約をしていないんだが大丈夫かね」

男が受付カウンターの前で立ち止まると、犬は行儀よく床に座った。

「どういったプレイをご希望でしょうか」

「うちの犬が……この子なんだがね、散歩中初めて発情したんだ。可哀想で去勢手術をしていなかったんだが、決まったお相手もいなくて」

「左様でございますか。可愛らしいわんちゃんでございますね。わんちゃんの身体の大きさから見ますと、この辺りの体型の子が宜しいかと思いますが」

黒服がファイルを開き男に見せる。そこに並んでいる写真は計八名分。可愛らしい顔と、アナルのアップ。さすがに男も驚いたようだった。

「全員犬とできるのか」

「はい。こちらのボーイは皆獣姦可能でございます」

「すごいな……」

しかし人間の好みと犬の好みは違う。突然誰がいいかと聞かれても男には選べないだろう。黒服が助け舟を出すように言った。

「初めての発情とのことでございますので、ご主人様もご不安でしょう。この中ですとこの『ツカサ』が一番獣姦に慣れておりますし、元々大の犬好きで、人間との性交の経験もございません」

「なんと……まさか犬とだけなのか」

「いえ、中には出張を望まれて牧場で馬と、なんてこともございますので犬だけではございません」

男はハットを取り、ファイルに顔を近付けてまじまじとツカサの写真を見た。

「うん、よしこの子にしよう」

「ありがとうございます。ではお部屋へご案内致します」

黒服が受話器を上げた。そして二言三言話すとすぐに別の黒服がやってくる。

「お待たせ致しました。ご案内致します」

※　※　※

黒服の案内で部屋の前に立ち、そしてノックの前に深呼吸。黒服――石坂――はここに案内に来てくれているだけなので、ここでバイバイだ。そしてノック。
「失礼します。ツカサです」
ドアを開けると大きな犬がすぐ近くに座っていた。
「わ、可愛い。こんにちは」
真っ黒な犬はしっかりと躾をされているらしい。確かに興奮している様子は見られたけれど、突然襲ってくることはない。
「やぁ、ツカサくんだね。宜しく頼むよ」
落ち着いた声にハッとして顔を上げる。ソファにはおしゃれなおじいちゃんが座っていた。
「失礼しました」
客に挨拶をする前に犬に目が行ってしまった。頭を下げるとおじいちゃんは笑う。
「いいんだよ。この子はドリーという。初めての発情でね。偶然通りかかった犬に発情してしまったんだがその場で交尾させるわけにもいかない。かと言って他に相手もいなくて困ってしまって。まだ交尾の仕方も知らないような子だから大変かもしれないが」
「わ、初めてなんですね。嬉しいです！」
このおじいちゃんは紳士だ。中には「俺のペットとやらせてやるんだ」という思いが強い人もいる。そういう主人に飼われているペットは大抵同じような性格で、こちらのことなどお構いなしで「抱いてやってる」風に圧し掛かってくる。
「触ってもいいですか」
「もちろん。すぐに始める必要はないよ。時間も長めに取ってもらったから、ゆっくり楽しんでくれたら嬉しいよ」
ここはプレイ内容と時間で料金が変わる。もちろん時間については黒服から聞いているが、あえてこうして直接言ってくれるところも紳士的。そして、服や雰囲気からしても確実に富裕層。
「……ドリーって呼んでもいいですか」
「あぁ。そう呼んでやってくれ。ツカサくんはドリーの初めての相手なんだ。よそよそしいプレイは可哀想だ」
「ありがとうございます。ドリー、おいで」
お行儀よく座ってこちらを見上げているドリーに手を伸ばすと、ドリーは一度飼い主を振り返った。確認を取っているのだろう。本当によく躾された犬だ。
「ドリー。ツカサくんがお相手をしてくれるよ。怪我をさせないようにしなさい」
「わん」
まるで心得たと言わんばかりの表情に頬が緩む。本当に可愛い。
「ドリー、触らせてね」
ドリーも近付いてきてくれたので、まずはゆっくりと手を動かして顎を撫でる。
（ふわふわ……）
ちゃんとシャンプーされている証拠だ。毛並もツヤもいいので食べ物から気を遣われているのが分かる。

「ドリー、ふわふわだねぇ。可愛いねぇ」
ドリーが目を細めたのを見て、両手でドリーの顎から首辺りの毛を撫でる。ふさふさでふわふわ。とても触り心地がいい。
（今からこの子に……）
そう考えるとドキドキしてしまう。犬なので交尾の体位は後背位だ。ドリーを見ながらできないのは寂しいけれど、無理な体位はドリーの負担になってしまう。それに首筋にふわふわが当たると思えばそれはそれで悪くない。
「キスしよっか……」
時間は三時間もある。だから最初はゆっくりお互いを確かめてからと思ったのだけれど、毛を撫でていたら股間に血が集まり始めてしまった。
「わふっ」
幸いドリーもツカサを気に入ってくれたようだ。おじいちゃんも紳士的だし変に声を掛けてくることもない。飼い主に見られながら犬に抱かれる――そう思うとどうしたって興奮してしまうのだ。
「んっ……ふふっ」
目は開けたまま、そして後頭部を撫でながらのキス。でも鼻を舐められてくすぐったい。
「可愛い」
キスよりも鼻を擦り合わせる方がいいのだろう――そう判断して目を合わせながら鼻を擦る。
「んっ……ドリー可愛い」
はっはと息が荒くなってきている。ドリーも興奮しているのだ。
「したいね……気持ちいいこと、しちゃおっか」
でも正直に言えばもう少し焦らして楽しみたい。焦らしながらお互いの興奮を高めて、もう無理となったところで繋がるのだ。でもそれだと初めてのドリーにはつらいかもしれない。
座るドリーの足の間を覗き込む。もうペニスはギンギンに勃起してしまっていた。
「ごめんね、早くしたかったね」
後頭部から背中を撫で、そのまま身体に触れさせたままの手をゆっくりと陰部に伸ばす。そして濡れたペニスに触れる。
「わうっ」
「ん……怖くないよ。これから交尾しようね。大丈夫」
そっとペニスを手で擦る。本当は舐めたいけれど、やはり腰を振りたいだろう。
上向きのカメラが内蔵された床の前に移動して、結合部がしっかりと映るようにさりげなく位置を確認。
「ドリー……ここに入れるんだよ」
手早く下着とズボンを脱ぎ、ドリーの前で四つん這いになる。きっとドリーの目にはアナルを拡げるプラグが見えているだろう。
「ここだよ……今入れられるようにするからね」
後ろ手でプラグに手を伸ばすと、腕に濡れたものがぶつかった。鼻だ。ドリーがアナルのすぐ近くに顔を寄せている。

「まだだよ……このままじゃ入らないから……ンッ……」
ずる、と抜けたプラグ。使ったローションはメス犬のフェロモン入りのものなので、ドリーも戸惑うことなく交尾できる。
「……ご主人様、ドリーのおちんちん、いただいてもよろしいですか」
これはお決まりの御挨拶だ。あくまでツカサはドリーの相手を「させていただく側」であって、大切なペットの交尾相手としてお許しをもらえるかは確認しなければならない。
「あぁ、頼むよ。もし痛むようなら遠慮せず言ってほしい」
「ありがとうございます」
残念なのは全裸になれないことだ。本当は極力服を脱いでしっかりと触れ合いたいのだけれど、やはり爪で怪我をする可能性がどうしても高い。
（まぁ、人間相手の方が怪我をしやすいらしいけど……）
同僚はいつも怪我をしている。本人はそれを望んでいるらしいからいいけれど、人間より動物の方が優しいよな、と思ってしまうのだ。
「んっ……ドリー、おいで。ここにおちんちんを入れるんだよ」
主人にドリーの初交尾がしっかりと見えるように身体の向きを変えてから、圧し掛かるドリーのペニスをそっと握る。そして人間のものとは異なる先端をアナルにあてた。
「ここだよ……」
トテトテと必死に足踏みする様子が可愛い。愛おしくて可愛くて、でも今からこの子に抱かれるのだと思うだけで先走りが零れてしまう。
「んっ……あ……ああっ！」
つるん、と先端が入るとそのままペニスが押し込まれた。
「あっ……ん、上手っ……ドリーすごいよ、上手だねっ、交尾できてるっ、ああっ！」

〜〜〜〜

「お疲れ様でした」
おじいちゃんとドリーを送ってきた石坂が部屋に戻ってきた。頭を下げて迎えの礼を述べ、報告をする。
「ドリーはとてもいいこでした。初めてとは思えないくらい交尾が上手で……その、僕は三回もイってしまいました」
恥ずかしい。でも詳細報告も仕事の一つだと思えば言わないわけにはいかない。そしてその内容に、石坂も目を見開いた。
「三回もですか」
「はい……最初は普通に挨拶をして触れ合って、後背位で種付けをしてもらう興奮で射精しました。二回目も後背位で、でも今度は前立腺をおちんちんで擦られる刺激で僕だけがイってしまいました」
「お客様はなんと？」
「交尾で僕がイったらドリーの自信に繋がるからイっていいと言ってくださいました」

だから勝手にイったのではない、と伝える。
「そうですか。ドリーは交尾がとても上手な犬だったんですね」
「はい！」
自分を褒められたわけでもないのに嬉しくなってしまう。もっとドリーを褒めてほしい。
「それで、三回目は？」
「二回目の交尾の後、時間が微妙で……でもドリーが全身を清めるように……労わるように舐めてくれて、そしたら気持ち良くて勃起してしまって」
「ツカサさんは本当に動物がお好きですね。犬におちんちんを舐められて勃起させてしまったんですね。二度もイった後だというのに」
「っ……はい……そしてそのまま、ドリーに舐めてもらって射精させてもらいました」
「そうですか。では怪我がないか確認しますので仰向けで寝転んでください」
更に恥ずかしい時間の始まりだ。勃起はしないけれど、犬に抱かれて悦んだ身体を一つ一つ丁寧に確認されるのは恥ずかしい。
「……まずは顔……怪我はないですね」
「はい。本当にいいこだったんです」
「そのようですね」
それから石坂の視線が首、そして肩、胸――と下りていく。
「乳首が赤いですね」
「あ……」
赤い。でもそれだってわずかな差だ。この石坂がツカサの担当だから気付いただけで。
「乳首もたくさん舐めてもらったので……」
「お客様には？」
「いえ！　少しも触れていません。ドリーだけです」
「そうですか。では犬の舌に与えられた刺激で乳首を赤くしたんですね」
「っ……はい……」
恥ずかしい。でもすごく気持ちがいいのだ。人間にはされたことがないので感触の違いは分からないけれど。
「あとでしっかりと洗いましょう。お腹も……外傷はないですね。足も大丈夫……ではうつ伏せになってください」
犬に抱かれた身体の確認。石坂は念入りに、隅々まで確認をする。
「……少し赤くなってしますね」
「そうですか？」
石坂はほとんど身体には触れてこない。しかし、背中を見るときはしっかりと見られる。
「はい。恐らく足が当たっていたんでしょう。服は？」
「最後舐めてもらうまでは上半身は着ていました」
後背位ですると、どうしても犬の前足が背中に乗ることになる。そのとき不意に爪が当たってしまうこ

とがあるのだ。
「痛みは大丈夫ですか」
「全くないです」
見えないけれど、痛みも違和感も全くない。石坂は少々心配性過ぎるのだ。
「ではシャワーの後にクリームを塗っておきましょう。四つん這いになってお尻をあげてください」
「……はい……」
一番恥ずかしい時間。犬のペニスを受け入れたアナルの観察だ。
「……外から見た限り切れてはいませんね。でもぷくりと腫れている。たくさん擦られましたか」
「はい。射精に入るまでが長いタイプで……すごくよかったです……気持ち良かった……」
思い出すだけでうっとりしてしまう。獣独特の匂いと息遣い。そしてもどかしい腰の揺れ。
「そうですか。では中を確認します」
肛門鏡でアナルを開かれ、内部にカメラが挿入される。
「あぁ……これはすごい……たくさん出してもらいましたね」
「はい……」
恥ずかしい。でも嬉しい。もっと見てほしい。ちゃんと中を見て、犬としたのだと、そして犬に種付けをしてもらって悦んでいるのだと何度でも認識させてほしい。
「ドリーの射精は長かったですか」
「はいっ……すごく……とぷとぷってたくさん出て……その感覚で射精してしまったくらいなので……」
今日初めての射精だったとはいえ、前立腺への刺激よりも種付けの感覚で射精するなんて。でも本当にすごかったのだ。
「そうですか。怪我もなさそうですし、そろそろ精液を出しましょうね」
「……はい……」
本当はもっとこのまま精液を腹の中で温めておきたい。当然卵生の生き物でもないのだから精液を腹に蓄えておいたって孕めるわけでもないのだけれど。
カメラと肛門鏡が抜かれ、開かれていたアナルが形を戻した。
「腰を下ろして……犬がうんちをするようにして精液を出しましょうね」
「ぁっ……」
犬に例えられると興奮する。あぁ、やはりドリーと一緒に飼われてみたいかもしれない。

〜〜〜〜

「私は隣にいますから。もし無理だと思ったらすぐに声を掛けてください」
「はい……」
新城も石坂もすぐ近くにいた。石坂は正座し、新城は携帯をこちらに向けている。
「わふっ」
「ウィン……」

ぷりっとしているであろう陰嚢をウィンが舐めた。初めての感触。ぬめりのない舌の摩擦が気持ちいい。
「ああっ……ウィン……もうほしい……」
苦しい。早く出したい。こんなに興奮したのなんて初めてだ。
「わふっ！」
どさ、と身体に重みが加わった。背中の二点に重みが集中する。微かな痛みとかなりの重み。でもそれすらも愛おしい。
「んっ……あっ……」
見なくても分かる、ウィンの勃起したペニスがお尻に触れる。足踏みの度にそれが擦れて気持ちいい。でもアナルにほしい。ちゃんと中に入れて交尾をしてほしい。
「ウィンっ……」
もし相手が人間だったら「入れて」と言えば入れてもらえただろう。でもウィンは犬で、言葉は通じない。それに手も使えないから中に入れてもらうのには運が必要だった。
「んっ……ウィンっ……あぁ……」
亀頭がアナルに触れた、入る――そう思ってもそれは簡単に逸れてしまう。もどかしい。ほしい。中に。早く交尾したい。種付けをしてほしい。
「やぁっ……ほしいよおっ」
「……ツカサさん、介助をしても？」
「え……？」
「ウィンもツカサさんとするのは初めてですから。ツカサさんには触れません。ただ、私がウィンのペニスをツカサさんのアナルに誘導します」
石坂の申し出はありがたい。でも人の手助けなんて。
「ツカサくん、犬同士の交尾でも初めてのときは人間が手を出してやることもあるんだよ。もちろん入ればすぐに手は離すけど」
「あ……そうなんですか……」
それなら――早くほしいから。
「石坂さん……交尾の介助お願いします……」
もう限界だった。出したい。入れてほしい。残念ながら石坂にほぐされても一度たりとも快感は得られなかったけれど、交尾を経験するということが第一の希望のようなものだ。それにこんなに興奮しているのだから、きっと身体は満たされなかったとしても心はちゃんと満たされる。
「はい、では……ウィン」
「わふっ」
テトテトという足踏みが止まった。そしてペニスがアナルに触れる。
「ウィン」
「わんっ」
「ああっ！」
ずん、とアナルに衝撃が走った。大きい。でも痛みはない。圧迫感はあるけれど、ぶわっと胸に悦びが

溢れる。
「あ……すごいっ……あ……ああっ……」
ウィンが止まることなく足踏みをする。その度にペニスが直腸を擦り、入っているということを意識させた。
いやらしい。本当に――本当に入っている。犬のペニスが。
「あ、ああっ……あっ……あ……」
交尾をしているのだと感じたくて、耳元で聞こえる息遣いや重みだけでは足りなくて、頭を下げて足の間から下半身を覗き込む。するとそこにはしっかりとウィンのふわふわの毛が見えて、テトテトと足踏みする様子が見えて。そしてその間、浅ましく勃起をした自分のペニスからは白濁が糸を引くようにして垂れていた。
「ああっ……」
出ている。射精している。だらだらとした快感で、夢の中で射精したときのような激しい快感ではない。でもすごく気持ちいい。心が満たされた、最高の絶頂。
「ああっ……あああ、あああああ！　気持ちいぃ！」
泣きそうになるほどの快感。幸福。今までつらかったことの全てが吹き飛ぶような充実感だった。
「ああああっ！」
背中に乗る重みが消え、すぐに体内に埋まるペニスがぐるりと腸壁を抉った。
「あ……」
「射精だよ。ウィンがツカサくんのお腹の中に精液を出してる」
「あ……僕……」
じんわりと温かいものがお腹に広がる。自宅で腸内洗浄をしたときとは全く違う、穏やかで温かい温もり。
「ああ……ウィン……うれし……」
ウィンが自分の身体で射精してくれた。交尾をして、種付けをしてくれている。
犬の射精は長いはずなのに、その十五分ほどの時間はあっという間だった。お腹に手を当て、目を閉じてうっとりとしている間に終わってしまった。
「ウィン、ステイ」
「わふっ」
ずるりとペニスが抜け、身体からは完全にウィンの温もりが消えてしまう。でもお腹には、ちゃんと交尾の跡がある。ウィンに抱かれたという証。
「痛いところはない？」
「あ……」
顔を上げると新城が触れられるほどの距離にいた。
「あ……」
「……ぼうっとしてるね。傷のチェックは石坂がするから。初の交尾お疲れ様。ウィンに射精させてもらえてよかったね」

「あ……はい……うれし……お腹、いっぱい……」
「うん、ウィンも射精したけど、ツカサくんも上手に射精してたよ。動画も撮ってあるし、写真も撮ったから。帰りに渡せるようにしておくね」
「あ……」
お礼を言いたかったのに、うまく言葉にできなかった。でもそれも分かってくれているような笑顔を見せ、新城はウィンを連れて退室した。
（ウィン……行っちゃった……）
ぎゅっとしたかった。そして交尾してくれてありがとうと言いたかった。でももしかしたら生で人間のアナルに挿入しているので、ウィンにも処理が必要なのかもしれない。
「ツカサさん、お疲れ様でした。身体が痛いでしょう。そのまま寝転んでみましょう」
服を脱ぐように言われたので、全裸になってから仰向けに寝転ぶ。まだ余韻でぼうっとしているのか、不思議と羞恥は感じなかった。
「お尻に痛みはありませんか」
確かに身体は痛い。でもこれは幸福な痛みだ。ウィンと交尾できたからこその痛み。
石坂は上から見下ろすようにして全身を検めた。真剣な目でじっくり、身体中を見られている。犬に抱かれて悦び、触れることなく射精してしまったペニスまで。
「はい、大丈夫です」
「……分かりました。ではシャワーを浴びましょう。歩けますか」
「ん……はい……」
身体はぐったりと重い。けれどもう行為は終わったのだから、いつまでもここにいるわけにはいかないだろう。気遣わしげな視線を無視して重い上体を起こす。
「こちらです」
お風呂は部屋の内部にあった。全裸だし、アナルには大量の精液を含んだまま。立ったらそれが零れてしまいそうで嫌だったので、四つん這いで移動できる場所にあるのは幸いだった。
浴室に入るとまず温かいシャワーで身体を流された。それから直腸にノズルを入れられ、シャワーホースからの腸内洗浄。

5万文字、犬とやっているだけです。
宜しくお願い致します！
gooneone
ツイッター　@gooneone11